

位である。あの顔は違ふのです。顔がムツ膨れて、下唇が肥つて、軽い水膨れになる。殊に上眼瞼が下がる。さういふ子供があつたら、醫者に見て貰ふことが第一です。

それからもう一つは、前に申した假性痴呆であります。これは、前額が低く、鼻がヒョロ／＼動く、鼻と口との境の鼻唇が下がつて、口が明いて居る。下顎が下に下りたがる。口を明けると非常に齒並が悪い、眠ると鼾をかく、こんな徴候の子供は智力の異常が多い、斯ういふことも御承知になつて居れば、實際に御便利であらうと思ひます。これ以上種々御話致したいこともありまされども、大分時間も長くなつたやうでありますから、これで御免を蒙ります。(終)

蓮葉のにこりに染まぬ心もて

何をか露を玉とあざむく

事足らぬことな恨みそ鴨のはき

短かけれども潮に浮ぶなり

(僧正遍照)

(鴨長明)

## 子供の色彩感覚に就いて(下)

菅原教造

### 十二、ウインチ氏の實驗

前號では色の感覺と、色の名との發達に就いて、いろ／＼學説を紹介しましたから、今度は最近の研究著ウインチ氏(W. H. Winch)が英國に於ける所々の幼稚園で實驗した結果を紹介しようと思ふ。

此の實驗を行つた學校では、鞠「玉とし」といふやうな着色した器具を用ひて、色名の教育を授け、且つ其の色は各學校を通じて餘り達がなく、又教師が色の名を教授する時に、總ての色の名を公平に教へて居るのであるから、兒童は自分の好む色だけではなく、總の色名に就いて教育を受けて居る譯である、故に斯う云ふ公平な教育を受けた兒童に就いて、色名の實驗を行ふことが出來たのは、實驗者に取つては非常な幸と云ふべきで、

而も其の實驗は各二回を重ねたのであるから、此の結果から推して、感覺の方の順序を考へること出来やうと思ふ。尙此の實驗には次に掲げる二の法則が定まつて居るのである。

(一) 器物たる着色の鞠は赤、樺、黄、緑、青、薔薇の順序に、又「玉とをし」は白、黒、赤、琥珀、緑、青の順序に配置し、或る場合には此れと反對の順序に配置すること。

(二) 鞠と「玉とをし」とは其の色彩と明さとが、各異つて居ること。

(三) 實驗は各兒童に就いて、個々別々に行ひ、第一回の實驗が終つた後、暫く間を置いて次の實驗を行ふこと。

### 十三、第一回の實驗

最初の實驗は三歳から四歳迄の七人の兒童に施したもので、其の學校では總體に識別の力が乏しく其の中で三人は僅に赤と黒の二語、一人は青と白の二語、一人は赤、黒、青の三語、一人は赤、黄

青、白の四語を知つて居たに過ぎず、此の實驗は極めて不結果に終つたのである。

### 十四、第二回の實驗

第二回の學校は前の學校よりは市街に接近した場所、其の周圍に色彩に乏しく、兒童の視覺を刺激する物が少かつた。最初に實驗した兒童は三歳一ヶ月から十ヶ月迄の年齡で、其の中の一人は實驗者の與へた色名の出づるを理解することが出来ず又或る色に對しては單に「色」と答へ、次に他の色を示すと「違つた色」と答へた子供もあつた、E、Sといふ子供は單に「色」と答へた場合が二度、其の他の色には皆「黒」と答へ、F、Mといふ女兒は青色を見て、惹き付けらるゝやうに立ち上つた後に、二回とも彼女獨得の色名「E」と答へ、緑を「空」と答へ、他の三人の子供は總の色を「色」若しくは「色物」と答へたに過ぎない。

次の兒童は四年二ヶ月から九ヶ月迄の年齡で、其の中で一番年長の子供すらも單に「色」と呼んだこ

とが二三回に止まらなかつた。

子供が或る色を呼ぶ場合に、單に「色」といふ言葉を用ふることが、何故斯程に多いのであらうか。思ふに此の場合の「色」と云ふ言葉の中には赤、青、緑、樺といふやうに明に識別されて居る個々の色が含まれて居るものであつて、子供は其の色の名を知らない爲めに、單に「色」と答へるのであると見るのが正當であると思ふ、若し此れが事實であるとしたならば、感覺の方の力が色の名よりも先に發達して居ると云はなければならぬ。

### 十五、第三回第四回の實驗

第三回到實驗した學校は前の二校に比べて、其の周圍の社會が遙に上級であつたが、然し實驗を施すに適當な兒童を得る事が困難で、辛じて三歳五ヶ月の子供と、四歳になる四人の子供を得た。其の中でK、Sといふ子供は「色」と呼んだことが一度、青と白の名を用ひたのがP、Sといふ女兒一人で、他の兒童は明かに言ひ現はすことは出来な

かつたけれども、少くとも四個以上の色名を持つて居たことは事實であると實驗者は云つて居る。第四回目の學校は、喧噪なる街路の附近に建つて色彩に乏しく、且つ其の周圍の空氣が陰鬱であつた。A、Nといふ子供は總の色を漫然「青」と呼んだ、これは恐らく「色」と云ふ意味で「青」の言葉を使つたものと思はれる。そして此の學校でも不思議にも「色」といふ言葉を用ひた子供は一人もなく又第二回の實驗の時に琥珀色及び緑を「草」と呼んだ子供もあり、又G、Oと云ふ子供は赤、白、黒の三の名を知つて居たに過ぎなかつたが、一般から云ふと此の學校の兒童は比較的色彩の知識が進んで居た方であると云ふことである。

### 十六、第五回第六回第七回の實驗

第五回目の學校は比較的上流社會の區域に建つて居て、而も公園の附近であつた。其の爲めに子供の年齢は一は三歳から四歳、一は四歳から五歳迄の子供であつたにも拘らず、緑の色名が著しく

發達して居たといふことは、非常に注目すべき現象である。此の五人の子供の中で、一人の女兒は僅に赤の一語を知つて、これを總の色に當て嵌め又 G、B と云ふ子供は青、暗の二語、T、H は緑、黒、白の三語、E、J は他より四五ヶ月間も年長であつたのに、僅に青、黒、緑の三語を知つて居たに過ぎなかつた。此の實驗では前に云つたやうに緑の語が最も多く用ひられ、次に薔薇、樺、褐色といふやうな色は年長になるに従つて發達して居たといふことは、非常に興味ある研究問題で、色彩感覺の發達と云ふものは、極めて些細な周囲の情況にすら影響を受けるものであることが明らかに理解されて来る。

第六回目の學校は倫敦の場末近くに建つて居たに、其の周圍は未だ市區改正などの躍に遇はないうで、空地の多い中に民家が疎に建つて居る場所であつた。此の學校の兒童は總體に色名の知識に乏しく、L、P と云ふ子供の如きは他より七ヶ月

も年長であつたのに極く普通な色名たる「赤」の言葉すらも持たず、O、N は赤の一語、W、IN は話か自由に出來る年輩であつたのに、種々違つた方法で試みたけれども、一の色名すらも知らなかつた、此の學校の實驗で最も奇異なる現象は、兒童の間に青と緑の言葉が全然缺けて居ることである。此れ迄の實驗には全くと云ふべきである。

第七回の實驗を行つた學校は、前の二校よりは遙に上層の區域にある學校で、鬱々とした樹木や、多くの草花などが生ひ茂つた地に建つて居た。此の學校には全然色名を持たない子供もあり、又白、黒、赤の三語を持つに過ぎない子供もあつたが、全體から云ふと、確かに色名が進歩して居た方で、又、緑の名は先きの公園附近の學校と同様に、他よりは遙に進んで居たと實驗者は云つて居る。

十七、此等の實驗に表はれた共通點  
此れ等の實驗に表はれた色の名の發達は、餘程複雑な結果を表して居て、殆んど結論に惑ふやうな

状態であるが、然し此れ等を綜合して、其の關係を考へて見ると、色の名の發達には自ら多くの共通點が見出されて來る、最も多く正確に言ひ規された色名を、最も早く發達した色名であるとして此の實驗の經果を調べて見ると、黒、白、赤の色名は同等に早く發達し、次に青、緑、黄、薔薇、樺と云ふ順序で發達して居るやうである。然し此の順序は同時に色彩感覺の發達の順序とすることが出来るか否やは元より疑問である。

十八、子供は何故色の名を誤るか  
子供が色の名を云ひ表すときに、何故に彼のやうに間違をするのであるかといふのに就いて、ブライエル氏は其の著「兒童精神」に次の如く論じて居る、「子供には正確な色彩感覺もあり、又總の色の名も知つて居るのであるが、唯此の二を正確に結び付ける能力に缺けて居る爲めに、自分勝手な色の名を別な色に當て嵌めるのである」と。此の理論は確に半面の眞である云ふべきで、例へば赤

といふ色の名と其色との關係が八ツキリ頭に纏つて居ないから、或は之れを緑と呼び、青と云ひ、黄と稱へるのである。今ウインチ氏が其の誤りを色分にした表に依ると、

赤									
を									
白	黒	青	緑	黄	白	黒	赤	緑	黄
と呼びしもの	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十三度	八度	九度	七度	二度	十五度	三度	廿三度	五度	一度

  

白	黒	青	緑	黄	白	黒	赤	緑	黄
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九度	三度	廿六度	十六度	同	同	同	同	同	同



それが赤、緑、黄、薔薇、樺といふ順序で段々に分れて發達するものであらうとウインチ氏は云つて居る、然し色名の發達が此の順序で發達するものだとしても、同様に知覺の順序がこれであると云ひ得ないので、感覺の順序に就いてはウインチ氏は別に二三年前から熱心な研究を重ねて居るゝといふことであるから、其の結果が發表されると、感覺の方の順序に就いて又種々な發見があらうと思はれる、其の機を得て再び諸君の爲めに研究の資を供し度いと思ふ。(完)

村雨の名残涼しき夕風に

吹かれて名のる山ほとゝぎす (荷田在満)

庭の面はまだかわかぬに夕立の

空さりげなく澄める月哉 (源頼政)

風吹けば蓮の浮葉に玉みへて

涼しくなりぬ日くらしの聲 (源俊賴)

## 園のをぐさ

後藤りん

○ 大人用の草履の片々ばかり落ちて居たのを拾ひ來りて

「先生々々、こゝに人間の草履が一つありました」

(五年男)

○ 象の話をする時、此の獸は何んでも喰べる時、鼻が手やお箸の代りをする。けれども象はおはなをたらさないから奇麗でいゝが、皆さんの様におはなをたらしては、汚くてお鼻で喰べることは出来ませんねえ、といふと、

「それだつて、いゝやあ、僕は象でないんだから」

(四年三ヶ月男)

○ ある日小春の唱歌をうたふ。その中に